

## 鄭永邦『北京發音反切表』の考察

孫 雲偉

### Research Related to Tei Eihou's *Peikin Hatsuon* *Hansetsuhyou*

SUN Yunwei

#### 提要：

『北京發音反切表』是鄭永邦於1904年編寫的北京話聲韻配合表，由「北京發音反切表」、「凡例」、「發音心得」三部分組成。該表在編寫時，主要參照威妥瑪『語言自邇集』的音節字和羅馬字注音以及鄭永邦、吳大五郎合著的『日漢英語言合璧』中的假名注音。本稿考察了『反切表』的聲韻母和音節字的注音，認為『反切表』是明治時期第一個兼及反切注音、假名注音、羅馬字注音的北京話音韻對照表。該表對我們了解20世紀初期的北京話語音，以及鄭永邦對北京話語音所作歷史貢獻有很大的參考作用。

キーワード：北京語音声、反切注音、假名表記、ローマ字表記

#### 目次

1. はじめに
2. 『北京發音反切表』の構成

3. 『北京發音反切表』の「發音心得」
4. 『北京發音反切表』と『語言自邇集』の関係
  - 4.1 『語言自邇集』の音韻体系
  - 4.2 『北京發音反切表』と『語言自邇集』の相違点
5. 『北京發音反切表』の仮名表記
6. 『北京發音反切表』の北京語音声研究史上の価値

## 1. はじめに

『北京發音反切表』（以下は『反切表』と略称）は鄭永邦<sup>1)</sup>が編纂し、明治37年（1904年）に文求堂が出版された。「凡例」によると、『反切表』は「北京語學習者カ發音ヲ講究スルニ便センカ為メニ編製セシモノ」と記されている。本資料は「北京發音反切表」、「凡例」、「發音心得」の三部分から構成され、全二枚である。「凡例」は「反切表」の構成及び北京音について説明している。「發音心得」は「反切表」の声母と韻母及び「北京音」の發音方法について説明している。また、六角恒広氏（2001：19頁）の書誌項目では、「發音心得」を附し、表一枚の形態となり、国立国会図書館に所蔵すると記し、これまで唯一の先行研究と言える。「反切表」は縦77cm、横40cmであり、声母、韻母の横縦の配列により音節字が加え、計461字が採用されている。そして、この表は声母の反切字と韻母の反切字からなり、反切注音<sup>2)</sup>だけではなく、仮名表記やローマ字表記<sup>3)</sup>も付されている。本稿は『反切表』に反映されている「北京音」を分析する上で、本資料の独自性と時代性を探

<sup>1)</sup> 鄭永邦（邦二郎）は1862年12月28日（文久2年）、長崎東古川町に生まれる。鄭永寧の三男であり、呉啓太と共に明治時代における初めて日本人が編纂した北京語教科書『官話指南』の著者である。

<sup>2)</sup> 反切は「第1字目の文字は注音される文字（「被切字」という）と声母が同じであること、第2字目の文字は注音される文字と韻母が同じであり、声調も同じであること、である。」（李思敬著；慶谷壽信 佐藤進編訳、1987年、35頁）とあり、「反切表」に声母の音節字と韻母の音節字が反切上下字と認識され、名付けている。

<sup>3)</sup> 「凡例」では羅馬字と称しているが、「反切表」の中に「英字綴」と称している。本文ではそれを一律に「ローマ字表記」と称した。

求するとともに、北京語語音研究史上の価値及び著者鄭永邦の北京語の発音に対する研究実態を解明したい。

## 2. 『北京發音反切表』の構成

「反切表」の縦列は声母であり、横列は韻母である。以下は「凡例」と合わせて、縦列と横列の順で紹介する。

### (1) 縦列の声母

縦列は6行から構成して、右側から一行目は1から53まで数字で声母の数を記している。声母は異なる介音により分類され、実際のところ現代漢語と同じくゼロ声母を含める22個の声母がある。

二行目、三行目と五行目は声母のローマ字表記である。二行目ではそれぞれ「祭」と「齊」、「几」と「期」、「西」と「希」に対応し、「ch」と「ch'」、「ch」と「ch'」、「hs」と「h's」<sup>4)</sup>と書かれ、“尖音”、“團音”の由来を区別している。“尖音”と“團音”まで区別することから、鄭氏は古代音韻の知識を持っていることが分る。二行目の以外は三行目、五行目と同じで、全て横線で表示している。三行目は声母“j”、“q”と“zh”“ch”それぞれ「ch」、「ch̃」で表し、“x”と“sh”は「hs」と「sh」で表示している。著者はそれらを混同しないようにわざわざ取り上げている。五行目は“声介合母”<sup>5)</sup>と“非声介合母”をはっきり区別する為、ローマ字表記で列挙している。五行目の「ch̃i」以外の“声介合母”は三行目と違っている。三行目は「ch̃」、「f」、「h」、「j」、「k」、「k'」、「l」、「m」、「n」、「p」、「p'」、「sh」、「su」、「t」、「t'」、「ts」、「t's」、「y」、「w」と書かれている。つまり、“非声介合母”と韻母を綴る際、三行目の声母を使い、それに対して、“声介合母”の場合五行目の声母を用いる。

<sup>4)</sup>「凡例」に「★符ヲ施シタル〈キー〉〈ヒー〉〈ヒユイ〉〈シー〉即〈機〉、〈希〉〈虚〉〈西〉ノ如キハ訛音ニシテ〈チ〉〈シ〉等ノ音ニ混同スルモ反切ニテ之ヲ顯ハシ得ルニ因リ之ヲ掲記セリ」とある。「祭齊西」は“尖音”（中古精組細音字）で、「几期希」は“團音”（中古見曉組細音字）であり、現代声母はそれぞれj、q、xに合流した。

<sup>5)</sup>“声介合母”は“在拼写法上把声母和介母（介音）当一个整体看，当声母看，这就叫‘声介合母’。”（拓牧1961：16頁）と解釈している。

以上の点から見ると、鄭氏は「反切表」を編纂する際、「非声介合母」の声母が存在しているという考え方を有している。そして、「非声介合母」、「声介合母」は韻母と綴る際、三行目と五行目はお互いに補助する関係であるが、三行目が主要な位置を占めている。また、五行目に拼音“j”、“q”のローマ字の左肩に「T」、「K」の標記で“尖音”、“團音”を提示した<sup>6)</sup>。

四行目は声母の仮名表記<sup>7)</sup>であり、六行目は声母の反切字である。それに対して、五行目のローマ字表記は六行目の声母反切字の発音であり、以下の表1にまとめた。

表1に“開口呼”の声母は“非声介合母”とし、計18個である。“齊齒呼”、“合口呼”、“撮口呼”は“声介合母”であり、それぞれ11個、15個、4個ある。“b”から“h”まで“撮口呼”の声母がないので、表には提示されていない。そして、表1空白の箇所は対応している声母がないという。

## (2) 横列の韻母

「反切表」の横列は5列からなり、第一列は1から18の数字で韻母の個数を表示している。第二列は韻母の仮名表記<sup>8)</sup>である。

第三列と第四列は韻母のローマ字表記であるが、第四列の「ên」、「eng」、

<sup>6)</sup>「凡例」に「北京音ハ<キ>ヲ<チ>ニ<ヒ>ヲ<シ>ニ訛ルカ故ニ(祭)ト(几)ト及ヒ(希)ト(西)ノ音ヲ混同セリ然レトモ正音ハ其區別アルコトヲ知ラシメンカ為メ羅馬字發音綴リニ於テ左肩ニ本音ノ頭字ヲ記シタ」とある。「T」の声母反切字は「祭齊疽趨」、「K」の声母反切字は「几期居區」となる。

<sup>7)</sup>声母に対する仮名注音は祭(チー)、齊(チー)、疽(チユイ)、趨(チユイ)、几(チ)、期(チー)、居(チユイ)、區(チユイ)、知(チー)、池(チー)、朱(チユ)、初(チユ)、夫(フ)、西(シー)、希(シー)、虛(シユイ)、何(ホー)、戸(ホ)、日(ジ)、如(ジュ)哥(コー)、克(コー)、古(クー)、苦(クー)、勒(ロー)、立(リー)、盧(ルー)、末(モー)、迷(ミ)、擲(ノー)、尼(ニー)、奴(ヌー)、玻(ポー)、坡(ポー)、鼻(ピー)、皮(ピー)、詩(シー)、書(シユ)、素(スウ)、糸(スー)、德(トー)、特(トー)、的(チー)、梯(チー)、都(トゥー)、突(トゥー)、茲(ツ)、疵(ツ)、租(ツウ)、粗(ツウ)、易(イー)、遇(イユイ)、屋(ウ)のである。

<sup>8)</sup>韻母に対する仮名表記は啊(ア)、哀(アイ)、安(アン)、昂(アン)、傲(アオ)、額(オ)、骸(エ)、恩(エン)、哼(エン)、衣(イ)、耶(イエ)、延(イエ)、因(イン)、英(イン)、阿(オ)、歐(オ)、于(イユイ)、烏(ウ)のである。

表1 「反切表」と現代漢語の声母対照表

四呼 \ 声母	b	p	m	f	d	t	n	l
開口呼	坡 po	坡 p'ò	末 mè	夫 fu	德 tē	特 t'è	挪 no	勒 lè
齊齒呼	鼻 pi	皮 p'ì	迷 mi		的 ti	梯 t'ì	尼 ni	立 li
合口呼					都 tu	突 t'u	奴 nu	盧 lu
四呼 \ 声母	g	k	h	j	q	x		
開口呼	哥 kē	克 k'è	何 ho					
齊齒呼				祭 chi	齊 ch'ì	西 hsi		
合口呼	古 ku	苦 k'u	戶 hu	几 chi	期 ch'ì	希 h'si		
撮口呼				居 chū	趨 ch'ü	虛 hsü		
四呼 \ 声母	zh	ch	sh	r	z	c	s	ゼロ声母
開口呼	知 chī	池 ch'ì	詩 shī	日 jī	茲 tzū	疵 tz'ü	糸 ssü	
齊齒呼								易 yī
合口呼	朱 chu	初 ch'ü	書 shu	如 ju	租 tsu	粗 ts'u	素 su	屋 wu
撮口呼								遇 yü

「ieh」、「ien」に対しては第三列に「un」、「ung」、「eh」、「en」と表示している。それ以外は全て横線で表示し、異同なしという意味を表していると思われる。また、韻母の第四列と声母の三行目を点線で繋ぎ合わせて、「英字綴合セノ格」と記している。つまり、横縦の声母と韻母を合わせて、音節字の綴りとして理解できる。

第五列は韻母の反切字で、全てゼロ声母字である。以下は声母韻母の合わせ方を例で説明する。

表2を見ると、「反切表」の韻母「ung/eng」は同じく反切字「哼」に属している。そして、“開口呼”“齊齒呼”“合口呼”の“声介合母”と綴る際、「迸」、「恆」、「窘」、「兄」、「冬」、「同」等の音節字があり、現代漢語の韻母“ong”、“eng”、“iong”に対応している<sup>9)</sup>。

表 2 韻母「ung/eng」と声母の配列表

四呼 \ 声母	b	p	m	f	d	t	n	l
開口呼	迸 peng	朋 p'eng	夢 meng	風 feng	等 teng	疼 t'eng	能 neng	冷 leng
合口呼					冬 tung	同 t'ung	濃 nung	龍 lung
四呼 \ 声母	g	k	h	j	q	x		
開口呼	更 keng	坑 k'eng	恆 heng					
齊齒呼				窘 chiung	窮 ch'ung	兄 hsiung		
合口呼	工 kung	孔 k'ung	紅 hung					
四呼 \ 声母	zh	ch	sh	r	z	c	s	ゼロ 声母
開口呼	正 cheng	成 ch'eng	生 sheng	扔 jeng	增 tseng	層 t'seng	僧 seng	
齊齒呼								用 yung
合口呼	中 chung	充 ch'ung		榮 jung	宗 tsung	葱 t'sung	送 sung	翁 weng

また、上述と同じ状況の韻母は以下の二つがある。

「eh」と「ieh」、「en」と「ien」は“i”の“声介合母”と綴ると、第三列の「eh」「en」を使うべきであり、「些」「列」「先」「千」等の音節字がある。それに対して、“非声介合母”と一緒に綴る際、第四列「ieh」、「ien」を使い、「天tian」、「店dian」、「別bie」、「撇pie」等の音が発音できる。また、「eh」と「ieh」は“撮口呼ü”の声介合母と綴る際、「絶」、「缺」、「雪」、「月」がある。つまり、「eh」、「ieh」に対応している現代漢語の声母は“ie”、“üe”、

<sup>9)</sup>「un/èn」は「ung/eng」と同じ状況で、「眞」、「臣」、「准」、「春」、「巡」、「薰」の音節字があり、それらに対応している現代漢語の韻母は“un”、“en”、“ün”となる。

“en”で、「ien」は“ian”と対応している。故に、“非声介合母”と“声介合母”の使うことにより、韻母の三列と四列が入り混じって用いることから、「反切表」は一定の中国語基礎を持っている学習者向けの音韻対照表だと思われる。そして、著者は複母音韻母の概念を有していたと考えられる。

第五列以下は声母と韻母を綴り合わせた音節字である。「凡例」によると、本表で反切に掲げる字数は合計434字あり、声母韻母両列に反切で表すことが不可能である音節字に圈点を付し、単独音27<sup>10)</sup>字、及び反切列外となる「兒」の一字を加えて共計461字である。しかし、発音の種類は実に420字となる。また、「凡例」に書いたように「兒(êrh/エ<sub>ル</sub>)<sup>11)</sup>は声母、韻母に属せず、故に単独に同音の字「兒、而、耳、餌、爾、邇、二、貳」を集めて、縦の左側から一行に表記する。

左側の二行目は各列の音節字の数である。声母「如(ju)」、「立(li)」、「挪(no)」、「奴(nu)」の行はそれぞれ6、7、17、4個反切字があると記しているが、実際に7、6、18、3個である。著者の数えのミスとなるが、「反切表」に用いた総字数は変わらない。

### (3) 声介合母

「反切表」は53個の声母がある。現代漢語より多い理由は韻母の介音“i”、“u”、“ü”は声母と組み合わせて“声介合母”になるからである。倪海曙(1962)により、“最早用声介合母拼音的拉丁字母汉语拼音方案，似为1908年刘孟扬的‘中国音标字’和1909年黄虚白《汉字音和简易识字法》一书附录《拉丁文臆解》中的拼音方案。”と述べている。言い換えれば、『反切表』(1904)の“声介合母”は日本人により、初めてローマ字表記を使って、創

<sup>10)</sup>「凡例」は単独音26字と記しているが、実際に「反切表」は27字とある。声母は祭(chi)、齊(ch'i)、几(chi)、期(ch'i)、知(chi)、池(ch)、夫(fu)、西(hsi)、希(h'si)、何(ho)、戸(hu)、日(ji)、糸(ssü)、茲(tzü)、疵(tz'ü)等15字があり、韻母の反切字は啊(a)、哀(ai)、安(an)、昂(ang)、傲(ao)、額(è)、餓(èi)、恩(un/èn)、哼(ung/eng)、衣(i)、阿(o)、歐(ou)等12字がある。

<sup>11)</sup>「凡例」に「兒ノ音ハ詩音ニ於テハ支紙頁等に屬シ又羅馬字ノ綴リニ在テハ(êrh)〈エ<sub>ル</sub>〉ト為シ本表中子母兩音列ニ屬セサル音ナル」とある。

作したものであると言えよう。

「反切表」において介音“i”の“声介合母”は「chi」、「ch'i」、「hsi」、「li」、「mi」、「ni」、「pi」、「p'i」、「ti」、「t'i」、「yi」計11個あり、“u”は「chu」、「ch'u」、「hu」、「ju」、「ku」、「k'u」、「nu」、「lu」、「shu」、「su」、「tu」、「t'u」、「tsu」、「t'su」、「wu」計15個あり、“ü”は「chü」、「ch'ü」、「hsü」、「yü」計4個あり、“非声介合母”「f」、「h」、「j」、「k」、「k'」、「l」、「m」等計18個ある。上述の“声介合母”から見ると、介音“i”、“u”は広く対応しているが、介音“ü”はj、q、x、ゼロ声母“y”のみを表し、“n”と“l”が示されておらず、著者の“声介合母”は完璧とは言えない。

また、現代漢語と比べると、「反切表」に表示していない“齊齒呼”は“ia、iao、iu、iang”、“合口呼”は“uo、ua、uai、ui、uan、uang、ueng”、“撮口呼”は“üe、üan、ün、iong”の15個の韻母は、“声介合母”で読み取れる<sup>12)</sup>。また、「反切表」では全196個“声介合母”の音節がある。その中では介音“i”は「見」、「先」、「兩」、「娘」、「迎」等89個の音節で、介音“u”は「壯」、「軟」、「亂」、「衰」、「竄」等のような89個の音節で、介音“ü”は「捐」、「圈」、「喧」、「月」等18個の音節がある。

そして、「反切表」の音節字から見ると、“主”、“出”、“戸”、“如”、“古”、“苦”、“路”、“牛”、“書”、“素”、“妒”、“土”、“祖”、“醋”は全て“合口呼”の字に属している。しかし、「反切表」は“合口呼”の箇所には収録せず、“非声介合母”の声母の所に韻母「u」の列に収録している。故に著者は「u」のみを純粋な韻母とし、“開口呼”の列に収録されていない。それは著者が“声介合母”を用いる際の規則だったと言えよう。

#### (4) 音節字

徳 (t) と特 (t') の行に「等」、「疼」二字は韻母“en”と“eng”の二箇所には収録されている。“deng”、“teng”は北京語の発音であり、“den”、“ten”は「等」、「疼」と対応していない。『語言自邇集』には“den”と“ten”の

<sup>12)</sup> 例えば、「修」は“声介合母”の「西 (hsi)」と韻母の「烏 (u)」と一緒に綴ると、「hsiu (現代漢語の xiu)」になる。



発音はないが、《現代漢語字典》（2005：285頁）により、“den”は東北方言であり、“擰”<sup>13)</sup>と書かれていることから、「反切表」の「等」は“擰”の書き間違いであろう。“ten”是北京語にはないが、著者は当時の北京語を聞いて、「疼」は二種類の発音が存在しているので、両方とも収録したのでであろう。

また、「反切表」は歛(ch'ua)、稷(jua)、給(gèi)、刻(k'èi)、倆(liá)、哦(nè)、您(nín)、誰(shèi)、塞(sèi)、得(tèi)の音節を収録している。「備考欄」により、このような漢字は「特ニ北京ノ普通語ニ用フル發音又ハ用字ナリ」と述べて、当時の北京語に存在する特殊な音節を挙げている。

### (5) むすび

以上のことから見ると、「反切表」の声母、韻母の表記は現代漢語と異なる点が存在するが、その音節分布はほぼ同じである。この「反切表」の特徴は以下の4点にまとめた。

①反切注音、仮名表記、ローマ字表記を全て収録している総合性のある声韻対照表である。

②反切表の声母は“齊齒呼”、“合口呼”、“撮口呼”の三呼を分けて“声介合母”を設定し、正確さと簡易性を兼ね備えている。

③反切表は“声介合母”の理念を徹底的に運用した音韻図表として独創性は優れている。

④北京語を図表化する時代を先駆した試みは鄭氏の強い創意によるものであり、明治時代末期の日本における北京語音声研究の代表作と評価されるべきである。

## 3. 『北京發音反切表』の「發音心得」

「發音心得」は著者鄭永邦が日本の仮名の発音を参考にしながら、北京語の声母、韻母に発音要領を表示したものであり、以下は各条引用して解説す

<sup>13)</sup> “擰”の簡体字は“拖”となり、“两头同时用力，或一头固定而另一头用力”という意味である（《現代漢語字典》第5版：285頁）。

る。

### (1) 声母 j、q について

(祭) (齊) ノ (チ) ハ (tsi) 「ツイ」ニシテ (几) (期) ノ (チ) ハ (ki) ニシテ齒音牙音等ニ屬スレトモ北京音ハ (チ) と (キ) ヲ訛リテ混同シ、我「タチツテト」ノ (チ) ト同様ニ發音ス其喉口音ハ疽趨居曲ノ類是レナリ。

本条は声母 j、q の齒音字 (祭齊) 牙音字 (几期) は北京音に混同し、日本語の「チ」と同じ発音と指摘している<sup>14)</sup>。

### (2) 声母 zh、ch、sh、r について

(知) (chi) (池) (ch'i) (朱) (chu) (初) (ch'u) (詩) (shi) (書) (shu) (日) (ji) ノ發音ニ於ケル (チ) (シ) (ジ) ノ類ハ何レモ卷舌音又ハ舌上音ト稱ヘ本邦ノ五十音中ニ此類ノ發音ナシ故ニ假リニ<sup>〰</sup>ノ符號ヲ加ヘ (ㄐ) (ㄑ) (ㄒ) (ㄖ) ト為シ以テ其區別ヲ示ス以上ノ發音ハ舌ヲ上腭ニ付ケ舌ノ中央ヲ凹メ舌尖ニテ (チ) (シ) ノ音ヲ發スレハ普通ノ (チ) (シ) ヨリ圓ヤカナル音ヲ為ス是レ蓋シ舌ノ凹ミタル處ニ聲ヲ含ムガ故ナリ。

(日) (ji) (ㄐ) 類ノ發音モ亦前掲ノ發音法ニ同シ然レトモ少シニテモ舌尖ヲ動カストキハ (リ) ノ音に類似スル音ト成ル注意スヘシ。

本条は現代漢語の zh、ch、sh、r 声母に卷舌音と舌上音などの各称を述べ、「舌ヲ上腭ニ付ケ舌ノ中央ヲ凹メ舌尖ニテ (チ) (シ) ノ音ヲ發ス」という発音過程を描写し、納得できる。ri (日) の発音は日本語の「リ」にならない注意も肝心である。

### (3) 声母 z、c、s について

(糸) (ssü) 茲 (tzü) ノ (ス) (ツ) ハ齒頭音ニシテ、先ツ上下ノ齒ヲ咬締メ唇ヲ開キ前齒ノ間ヨリ音ヲ發スヘシ但シ少シニテモ唇ヲ狭ムルトキハ變シテ (素) (su) (租) (tsu) ノ音ト成ル注意スヘシ。

<sup>14)</sup>「發音心得」に「北京音ノ「ヒ」ト「シ」ノ混同シタル原因ハ蓋シ「ヒ」ノ強音ナル為メ自ツカラ「シ」音ノ如ク發音スルモノナラン」とある。

本条は歯茎音 z, s に対して歯と唇の発音動作を描き、“zi” と “zu”、“si” と “su” の混同に注意を喚起している。

#### (4) 単母音

(啊) (a) (ア) ハ充分ニ喉ヲ開キテ聲を發スヘシ喉ヲ少シク狭ムレバ (a) 「エー」 (e) 「イー」 ノ音ニ轉ス。

(額) (ê) (オ) ハ喉ヲ開キ喉ノ奥ニテ發ス「ウ」「ヲ」ト混同セサル様注意スヘシ。(阿) (o) (オ) ハ (額) (ê) (オ) ト發ント同一ナルカ如キモ此音ハ口ヲ窄メ喉ニテ (オ) ノ音ヲ發スヘシ。

(衣) (i) (イ) ハ即チ母音ニシテ (e) (イ) ト相通ス但シ「ヤイユエヨ」即チ羅馬字ノ (y) 音ニ基キ「イ<sub>ア</sub>、イ<sub>イ</sub>、イ<sub>ウ</sub>、イ<sub>エ</sub>、イ<sub>オ</sub>」ノ區別アルヲ以テ子母音ヲ混スヘカラス。

(烏) (u) (ウ) ハ「(ユー) ニ通シ母音ナリ (wu) ノ (ウ) ト混同スヘカラス。

(于) (ü) (イユ<sub>イ</sub>) ハ「(u) (ユー) ノ撮口音ニシテ先ツ唇ヲ窄メテ發音ス (居) (女) (須) の類是レナリ。

以上広母音の a から狭母音 e, i への口開きの変化を喉の動きとして解釈している。また、非円唇の ê に対して、円唇母音 o への混同防止を提起している。次に、母音 i, u に対して接近音の y, w との違いを指摘した。最後に、ü は撮口音であり、唇を窄める必要性を述べた。

#### (5) 複母音

(鉸) (êi) (エ<sub>イ</sub>) 歐 (ou) (オ<sub>ウ</sub>) ノ如キ皆ナ喉頭音ニシテカヲ喉頭ニ用キテ發スルモノニシテ此等ノ音ハ喉ノ開閉廣狭微細ノ差ニテ區別セラルヘシ。

本条は複母音の「開閉廣狭」の「微細ノ差」を正確に描写したが、「喉頭音」の言い方は理解しづらい。

#### (6) 鼻音韻尾

(安) (an) (ア<sub>ン</sub>) ハ始メ「ア」ノ音ヲ發シ次ニ「ン」ノ音カ鼻ニ抜ケサル様舌ヲ顎ニ當テ「ヌ」ト發音スル如ク軽く押フヘシ。

(恩) (ên) (エ<sub>ㄣ</sub>) 亦上ニ倣フ。

(昂) (ang) (ア<sub>ㄥ</sub>) ハ充分ニ喉ヲ開キ「ン」ノ音ヲ鼻ニテ發シ。

(哼) (êng) (エ<sub>ㄥ</sub>) 亦上ニ倣フ。

中国語の前鼻音韻尾 -n を「ヌ」、後鼻音韻尾 -ng を「ン」に対応しているのが、-n と「ヌ (nu)」の [n]、-ng と「アン (an)」の [ŋ] に発音の類似性があるためであるが、日本語の「ヌ」と「ン」が全て中国語の -n と -ng に対応できるわけではない。

以上、著者は日本の仮名を用い、漢字の発音を真似て、北京語学習者により正確に北京語を発音する為の発音指導である。鄭永邦は北京日本公使館の通弁見習として、北京語語音の知識を最大限に利用して、発音方法の解説に工夫なされていることがうかがわれる。解説の多くは学習者に役立つが、韻母の喉音性、鼻音韻尾の区別などの記述は多少疑問が残る。

## 4. 『北京發音反切表』と『語言自邇集』の関係

### 4.1 『語言自邇集』の音韻体系

『語言自邇集』(1867年 以下は『自邇集』と略称)の「凡例」では、「本表中反切シテ掲ケタル字ハ重ニ「トーマス、ウェード」氏ノ「平仄編」<sup>15)</sup>ニ據ル」と記されている。「練習燕山平仄編 (Lien-His Yen Shan P'ing Tse Pien)」はトーマス・ウェード氏が編纂した『自邇集』の第七章である。また、『自邇集』の Part I Pronunciation を用いた漢字は「妒」と「嫩」の漢字以外「平仄編」のインデックスと全く同じである<sup>16)</sup>。その上で、ローマ字表記の発音も付している。以下は『自邇集』の声母、韻母、音節及び音節字について紹介する。

<sup>15)</sup>「平仄編」は“练习燕山平仄篇”の省略形式である。宋桔(2015:109頁)は、“‘练习燕山平仄篇’，可译作‘北京及其所在直隶府声调系统联系’。…本部分的解说使学习者了解这些声调练习的具体安排，即这些练习是按附于第一部分之后的语音表的字母顺序编排的。”と述べている。

<sup>16)</sup>「平仄編」と「発音編」の音節字はほぼ同じであるので、本稿において両章を統一し『自邇集』と称する。

『自邇集』の声母は全26個ある<sup>17)</sup>。その中には歯茎音 z, c, s が「ts、tz」、「ts'、tz'」、「s、ss」二種類の表記方法があり、歯茎音以外の声母は現代漢語拼音と全く同じである。

韻母は計46個<sup>18)</sup>あり、その中に現代漢語の韻母は全て含まれている。しかし、現代漢語にない韻母は以下のようにある。現代漢語の韻母“ui”、“un”、“ei”、“üan”は『自邇集』で「規(kuei)」、「愧(k'uei)」、「為(wuei)」；「棍(kuên)」、「困(k'uên)」；「累(lêi)」、「暄(hsüen)」等のように2種類の表記方法をしている。または「o」、「ü」、「io」、「iai」、「üo」の韻母があり、それぞれ「各(ko)」、「可(k'o)」、「喝(ho)」、「子(tzü)」、「次(tz'ü)」、「絲(ssü)」、「學(hsio)」、「約(yio)」、「楷(ch'iai)」、「涯(yiai)」、「略(lüo)」、「學(hsüo)」、「卻(ch'üo)」の音節字に対応している。「o」「io」、「iai」、「üo」は現代漢語拼音にはすでに消えた古い発音である。

『自邇集』の音節は全427個あるが、音節字は全420字を使用している。それは「黒('hê/hei)」、混('huên/hun)、暄(hsüan/hsüen)、各(ko/k'ê)、可(k'o/k'ê)、棍(kuên/kun)、困(k'uên/k'un)のように一つの漢字は二つの発音がある為である。

#### 4.2 『北京發音反切表』と『語言自邇集』の相違点

「反切表」の「凡例」には「羅馬字ノ綴リヲ示ス為メ子音列ノ傍ニ単重ヲ掲ケ之ヲ母音列ノ羅馬字ニ合併シテ其發音ノ綴リヲ得ヘシ」と記されているが、そのローマ字表記の由来に関することについては説明がなされていない。

<sup>17)</sup> 声母と拼音の対応は p(b)、p'(p)、m(m)、f(f)；t(d)、t'(t)、n(n)、l(l)；k(g)、k'(k)、h(h)；ch(j)、ch'(q)、hs(x)；ch(zh)、ch'(ch)、sh(sh)、j(r)；ts(z)、ts'、tz/tz'(c)、s/ss(s) とゼロ声母 y(y)、w(w) となる。

<sup>18)</sup> 韻母と拼音の対応は ih(-i)、a(a)、o(o)、ê(e)、o/êrh(er)、ai(ai)、ei(ei)、êi(ei)、ao(ao)、ou(ou)、an(an)、ên(en)、ang(ang)、êng(eng)、i(i)、ü、ia(ia)、iai/io/ieh(ie)、iao(iao)、iu(iu)、ien(ian)、in(in)、iang(iang)、ing(ing)、u(u)、ua(ua)、uo(uo)、uai(uai)、uei(ui)、ui(ui)、uan(uan)、uên(un)、un(un)、uang(uang)、uêng(ueng)、ung(ong)、ü(ü)、üo/üeh(üe)、ün(ün)、üan(üan)、üen(üan)、iung(iong) となる。

「反切表」の声母は53個の中では『自邇集』の中にある41個を用い、韻母は「èi」、「êng」のみ『自邇集』と違っている。「反切表」の声母、韻母のローマ字表記は『自邇集』の Part I Pronunciation を参考したと言えよう。

### (1) ローマ字表記

『自邇集』と「反切表」のローマ字表記を比較し、声母、韻母、音節の面から以下のようにまとめる。

まず、『自邇集』と「反切表」の違う声母は現代漢語の zh、ch、sh に対してそれぞれ (ch/chi)、(ch'/ch)、(h/h) となっている。『自邇集』と「反切表」の“j”、“q”と“zh”、“ch”同じく「ch」で表示し、後者は両者と区別する為に、zh、ch、sh の上に˘符号をつけている。『自邇集』にはそのような区別がない。『自邇集』の「'」記号は有気音を表しているが、「反切表」には「'」の記号で表示されている。現代漢語では前項については国際音声記号が定めた音声記号である。「反切表」では「'」の記号を用いた理由は不明である。また、『自邇集』では声母 h は「h」を用い、「反切表」は「'」符号を削除し、「h」となった。『語言自邇集』（初版：6頁）は、「The aspirate prefixed to the initial h is a very strong breathing, but the omission of it is not attended with the same serious consequences.」と述べている。つまり、「h」と「h'」は同じである。その為に、鄭氏は引用する際、有気音と混同しないように、この符号を削除したと推測できる。

次に、『自邇集』では韻母「èn」、「êng」と書いているが、「反切表」には現代漢語の韻母と同じく「en」、「eng」となることから、時代の変遷により、鄭氏のローマ字表記はすでに現代漢語の韻母への変化に対応し始めたと言える。そして、『自邇集』は韻母“iao”、“uo”、“üe”をはっきり分けているが、反切表はその3つの韻母を「o」のところにしている。それは“声介合母”の影響を受けたからだと思われる。また、『自邇集』では「學」は「hsio」、「hsüə」二種類の読み方がある。「反切表」は前項のみ収録し、その「hsio」は北京語の特徴を持つ発音である。

最後に、『自邇集』では「黑」が「hè」（文読）と「hei」（白読）二つの読

み方があり、「反切表」は「hei」のみを収録している。中古時代の「黒」は“入声字”で、「hê」と読む。時代の変遷につれて、「hê」の音は使わなくなって、「hei」の音を採用したと推測できる。また、『自邇集』では「若」が「ruo」と読むが、「反切表」は「ruo」と「rue」二つの読み方がある。当時の北京語では「rue」の音が存在していると思われる。

以上のことから、著者は正確、より理解しやすい北京語音韻表を作る為に、トーマス・ウェード氏のローマ字表記の良い点を取り入れている。その上で、清末の北京語の実際状況により、符号や、当時の発音に対する最も適当な表記を使ったと思われる。

## (2) 音節字

「反切表」の音節字は主に『自邇集』によった。

声母は53個の中に、祭(chi)、齊(ch'i)、疽(chü)、趨(ch'ü)、几(chi)、期(ch'i)、居(chü)、區(ch'ü)、池(ch)、朱(chu)、初(ch'u)、希(h'si)、虚(hsü)、何(h)、克(k)、盧(lu)、尼(ni)、玻(p)、坡(p')、鼻(pi)、詩(sh)、糸(s)、德(t)、梯(t')、都(tu)、突(t'u)、茲(ts)、疵(t's)、租(tsu)、易(y)、遇(yü)、屋(w)計23個が著者のオリジナルである。韻母は「哀(ai)」、「阿(o)」、「歐(ou)」以外の全て著者のオリジナルなものである。上述から見ると、著者がオリジナルな音節字は主に声母と韻母の列である。その理由は「反切表」が声韻対照表であり、『自邇集』はそうではない。その為、「反切表」の声母、韻母に対応している字がないからだと思われる。また、声母“j”、“q”、“x”の列も著者のオリジナルのものが多い。それは著者が“團音”のj(zii)、q(cii)、x(sii)と北京語“j”、“q”、“x”を区別する為に、重複にあげているからである。そして、その“團音”の音節字はほぼ著者の創作である。

「反切表」には『自邇集』の412字を用い、インデックスの順番により387字を取り上げた。声調練習の所に同音異調から「哀、歐、匠、晴、俏、妾、千、居、遮、詳、歐、間、軟、榮、哥、樂、迷、哦、甯、誰、洒、妒、醋、屋、列」<sup>19)</sup>の25字を取り上げられた。また、『自邇集』の「阿、綽、性、駱、謬、

絲、奇、楷、尺、訛、子、次」などの字は「反切表」で「啊、戳、姓、羅、繆、糸、齊、開、池、額、茲、疵」など新たな漢字に取って代わった。「反切表」には声調がない為、筆者がわざわざ同音異調から漢字を取って使用する理由は不明である。

著者鄭永邦は「反切表」を編纂する際、9割以上『自邇集』の字を取り入れたことから、トーマス・ウェード氏が編纂した『語言自邇集』を極めて重要視していることがうかがわれる。そして、「反切表」は文字の筆画数が少ない簡単な字を採用している傾向が見られる。また、『自邇集』にない漢字を用いたことから、著者は清末の北京官話口語の実態により、最大限に北京語語音を再現する為の工夫が見て取れる。

## 5. 『北京發音反切表』の仮名表記

初めて現れた仮名表記の北京官話教科書は『亜細亜言語集 支那官話之部』（1880 以下は『言語集』と略称）である。『言語集』は、廣部精がトーマス・ウェード氏の『語言自邇集』を基にして、編纂したものである。筆者は六角恒広『中国語書誌』（1994）、李無末《日本明治教科書匯刊（江戸明治編）》（2015）を参考にし、『言語集』から『反切表』までの25年間に北京語の音声に関わる教科書や字典等は凡そ41冊ある。その中では声母、韻母により仮名表記をしているのは鄭永邦が編纂した『反切表』のみである。つまり、この『反切表』は声母、韻母に仮名を表記した最初の北京語音節表と言える。

また、鄭永邦は『反切表』を編纂する前に、呉大五郎との共編により、明治21年（1888）『日漢英語言合璧』（1888 以下は『語言合璧』と略称）を出版し、その中に仮名表記についても触れている。『語言合璧』は日本人向けの漢語、英語の発音入門書である。この書は「名詞」、「短語」、「会話」の

<sup>19)</sup> インデックスでは「愛」、「偶」、「江」、「井」、「巧」、「且」、「欠」、「句」、「這」、「向」、「偶」、「先」、「輦」、「絨」、「各」、「勒」、「米」、「訛」、「寧」、「水」、「撒」、「肚」、「粗」、「武」、「裂」となる。



三部分から構成され、初学者が便利に学習する為、片仮名で漢語、英語の音を示している。筆者は『反切表』と『言語集』、『語言合璧』の関係を究明する為、3者の共通点を以下のように整理した。

①現代漢語のゼロ声母以外の21個声母は3者同じくア行からラ行までの仮名を使った。『反切表』はそれぞれの声母と韻母を個別に表記しているので、声母に宛てた仮名の種類は極めて少ない。声母“r”、“z”、“c”は『語言合璧』と『反切表』はともに「シ」、「ツ」、「ツ」で表記している。『言語集』は“r”にラ行の仮名を、“z”と“c”にサ行の仮名を宛てた。

②『言語集』の「前鼻音 n」は仮名の「ン」とし、「後鼻音 ng」は「ンヌ」とする。それに対して、『語言合璧』と『反切表』は「前鼻音 n」を「ヌ」で表し、「後鼻音 ng」は「ン」で表している。また、『反切表』の韻母22個中で「前鼻音 n」と「後鼻音 ng」を除く“a”、“ai”、“i”、“ie”、“ou”、“u”は『語言合璧』の仮名表記と全く同じである。

③『語言合璧』の“撮口呼 ü”は「呂<sup>ニ</sup>ー」、「女<sup>ニ</sup>ー」、「雲<sup>イ</sup>ス」、「月<sup>ユ</sup>エ」のように「<sup>ニ</sup>」で表している。『言語集』と『反切表』は拗音ヨ、ユを使用している。「<sup>ニ</sup>」の符号を使うより、拗音を用いた方が学習者にとって簡潔であり理解しやすい。

④『反切表』では有気音 p, t, k, c, ch, q の仮名表記の上に「一」をつけて、有気音を表している。『言語集』には有気音を区別する表記はなく、『語言合璧』は漢字字頭に「一」をつけ、有気音を表している。その為に、『言語集』では無気音と有気音を区別しづらい。『語言合璧』と『反切表』では、『反切表』が仮名の上に有気音を特定できる表記法を採用しているため、他の2書と比べて、簡潔さと理解しやすいを備えていると思われる。要するに、鄭氏は有気音と無気音について十分に認識していると言える。

以上の共通点から見ると、「反切表」は『言語集』と『語言合璧』の良い点を受け継ぎ、北京語実態によって仮名表記を改良した。そして、三者の共通点の割合から考えると、『反切表』は主に『語言合璧』を参考にしたと思われる。それらの声母と韻母についての分布や特徴などは今後の課題として

取り組みたい。

## 6. 『北京發音反切表』の北京語音声研究史上の価値

『反切表』は明治時代に日本人が編纂した反切注音、ローマ字表記、仮名表記を用いた初めての北京語音韻対照表として、北京語音声研究史上の価値は以下の4点をまとめられる。

①鄭氏はウェード氏の『語言自邇集』（1867）のローマ字表記と発音符号を参考すると同時に、“声介合母”の理念を徹底的に運用した。先行研究から見ると、『反切表』は日本人が初めて“声介合母”を用い、編纂した北京語音韻対照表であり、その独創性は優れている。

②鄭氏は広部精の『亜細亜言語集 支那官話部』（1880）と呉大五郎共編の『日漢英語言合璧』（1888）の仮名表記を参考した上で、声母韻母により、先行の仮名表記を改善して新たな仮名を表記した。また、先行研究から、『反切表』は明治時代における最初の声母韻母により、仮名を表記した北京語音韻対照表と言える。

③鄭氏は長年北京駐在の外交官だったため、北京語の音声に対する深い認識の持ち主として、有気音、巻舌音のような中国語の特殊な発音に対しては仮名、ローマ字表記以外に符号を付し、我々に20世紀初期の日本人がどのように北京語の音声を認識していたのかを考察するのに役立つものと考えられる。

④『反切表』に反映している韻図、反切、ローマ字表記、仮名表記など音韻の特徴ことから、この表は鄭氏の強い創意によるものである。故に、『反切表』は明治時代末期の日本における北京語音声研究の代表的な音節対照表と評価されるべきである。鄭氏は北京語音声研究史上にも大いに貢献することと評価できる。

## 言語資料

- |                |       |            |                         |
|----------------|-------|------------|-------------------------|
| 『語言自邇集』初版      | 1867年 | T. F. Wade | 発行者 Kelly & Walsh L.T.D |
| 『亜細亞言語集 支那官話部』 | 1880年 | 広部精        | 発行者 青山清吉                |
| 『日漢英語言合璧』      | 1888年 | 鄭永邦、呉大五郎   | 発行者 鄭永慶                 |
| 『北京發音反切表』      | 1904年 | 鄭永邦        | 発行者 田中慶太郎               |

## 参考文献

- 東亜同文会編（1936）『対支回顧録』下巻 対支功労者伝記編纂会
- 拓牧（1961）〈談声介合母連拼法〉《文字改革》第2期 語言文字報刊社
- 倪海曙（1962）〈最早用聲介合母拼音的拉丁字母漢語拼音方案〉《語文建設》10期
- 黒龍会編（1966）『東亜先覚志士記伝』下巻 東京原書房
- 李思敬著；慶谷壽信、佐藤進編訳（1987）『音韻のはなし：中国音韻学の基本知識』光生館
- 六角恒広（1994）『中国語書誌』不二出版
- （2001）『中国語関係書書目』（増補版）不二出版
- 張衛東譯（2002）《語言自邇集：19世紀中期的北京話》（英）威妥瑪著 北京大学出版社
- 中國社會科學院語言研究所詞典編輯室（2005）《現代漢語詞典》（第5版）商務印書館
- 黃伯榮、廖序東主編（2011）《現代漢語》北京高等教育出版社
- 傅民、高艾軍（2013）《北京話詞語》中華書局
- 李無未（2015）《日本明治教科書匯刊》（江戸明治編）中華書局